「『播磨国風土記』を書にする展」に携わって

魚住和晃

昨年（二〇二三年）の一二月一八日に開催された文化審議会無形文化遺産部会において、日本の「伝統的酒造り」とともに、「書道」がユネスコ無形文化遺産の提案候補として選出された。選出理由は「日本文化の多様性や深みを世界に広く発信していく観点で最もふさわしいと判断した」とある。ただし、その具体的な内容については触れられていない。

書道は中国で発したものであるが、それを輸入文化とする日本では、中国よりもはるかに多様な文化に展開させた。その第一に挙げられるのは、仮名の創生である。仮名は奈良時代に考案された、漢字の音を表音文字として用いることによって日本語を表記する方法である。もとの字体を楷書もしくは行書で書く真仮名と草書で書く草仮名に分けられ、草仮名を一層簡略して今日の平仮名になった。

さらに平安時代後期に、伝達と記録の用途に美意識が加わって、華麗な芸術文化として熟爛した。また、漢字と仮名を交じり合わせた調和体もあった。戦後には中国書法を重んじる伝統派と袂を分かち、古典から離れて現代認識を表現した近代詩文書派が生まれ、あるいは漢字、仮名にかかわらず、毛筆書表現を抽象画に近づけた前衛書派が、世界を席巻した時代があった。これらはいずれもが、中国にはない表現分野である。日本の書道文化は、かくのとおり選定理由のいう「多様性」の条件を存分に備えるものである。

「深み」というと、何といっても歴史を問うことになる。日本人が本格的に漢字を書き始めた飛鳥時代から、優に千四百年が経過している。その間、時代形成によってさまざまにそれを反映させながら、書道は常に時代の要として存在性を発揮し続けた。そして、いかに書表現をするかが人間

のありかたに結びつくようになり、人品や精神性を問う場としても新たな発展をとげていった。もとよりこの「深み」もまた中国に発するのであるが、日本においては、これを受容しながら、さらに日本の歴史の展開に準じて、その「深み」を人間の生き方と切り離すことができない、特質ある文化として形成していったのである。

　ところで、昨年の四月二九日から五月二八日にかけて、姫路市本町に位置する県立歴史博物館二階の城見ラウンジにおいて、県立姫路東高等学校書道部の生徒一一名による「播磨国風土記を書にする」展が開催された。『風土記』は奈良時代に国家事業として集大成されたことで知られる。ただし当時のものはすべて失われ、平安時代以降に転写された常陸国、播磨国、出雲国、豊後国、肥前国の五国の『風土記』が今日に伝わるばかりであるという。そのうちの『播磨国風土記』の原本は、現在は天理大学の所蔵になり、県立歴史博物館にはその完璧なレプリカが蔵備されている。

　『播磨国風土記』には、各地域の地名の由来が書かれている。例えば姫路は「日女道神（ひめじのかみ）」の「日女道」に発し、英賀保は「阿賀比古（あがひこ）・阿賀比売（あがひめ）」の二神の「阿賀」に発する。あるいは平野町にある白国は、「新羅国（しらのくに）」から「新良訓（しらくに）」になり、その音が残って「白国」になったとある。これによって、この地域が新羅から移住した人たちによって切り開かれた村であったことがわかる。そんなはるか遠い昔に名付けられた地名が今日に多数に生きているとはまさに驚嘆に値するが、『播磨国風土記』の原跡資料を地域の高校生に示すことで、こうした地名の由来に大いに興味を持ってもらい、その感慨を書作として書き上げてもらったものである。従って、通常の書展においてなされる美しく書き上げることを目的とはせず、原本の理解をいかに書作として反映させるかということに主軸がある、全く新しい試みになる。

一、『風土記』の執筆

　上宮法王（かみつみやののりのおおきみ）（聖徳太子）が隋の煬帝（ようだい）に、「日出処の天子」に始まる親書を届け怒らせたことは周知のところであるが、この草案を中国人が書くこと

はありえず、朝鮮からの渡来人も書くことはないだろう。それは天子とは地球上に一人だけの存在でなくてはならず、煬帝のほかに、天子を名乗ることは許されないからである。それだから煬帝は、この野蛮国のもの知らずがと怒ったのであり、よって、この間違いは日本人の手になるものに相違ない。そしてこのことから、当時の日本の朝廷には、すでに本式の漢文を綴ることができる日本人の書記官が存在していたことがわかる。法隆寺釈迦三尊像光背銘も、和語を交えながら漢文として書式を整えた技巧的な作で、これも日本人の手になるものであり、書法においても当時のありかたが具示されていると見るべきであろう。

それから数十年後の大化の改新の頃から、倭国は遣唐使を派遣するようになった。その後、白村江の戦いで唐の圧倒的な攻撃を受けて、倭軍は全滅するはめに陥ったが、幸いにも唐の追撃はなかった。倭国は友好国の百済を援護するために、破れることはわかっていながらあえて出陣したのであって、その義理を重んじたありかたが、儒教をもってなる唐から、むしろ同情を得たのかもしれない。あるいは、味方につける方が得策と考えたものか。

これに気をよくした倭国は、矢継ぎばやに遣唐使を送り込んだ。規模も大きくなり、四隻の船団に総勢四百余人、留学生（るがくしょう）、留学僧（るがくそう）のほか、楽団や表具師までを同乗させていた。留学生、留学僧は通常、十年以上の留学生活を送り帰国した。優秀で意欲に満ちた若者ばかりであったから、いずれにおいてもさぞかしすばらしい進歩をとげていたことであろう。奈良の都では、流暢な中国語がさかんにとびかっていたに違いない。また、僧侶たちの読経は、生きた中国語の詠唱であったことだろう。ほどなくして、倭国は国号を日本として認められる。

『風土記』に限らず、律令制度においては戸籍計帳や班田収授法など、すべてにおいて紙に文字を筆記する作業が欠かせない。朝廷はもとより、地方のすみずみの官衙（かんが）まで、筆記することが業務の中心的作業であった。

その中で急がれたのが、筆記者の育成である。そのために、朝廷から各地に、留学経験者が教授として派遣されたことであろう。筆記力の向上は、

その地域の発達と朝廷からの信頼を得る、重大な手立てとなっていたことであろう。

その筆記者、つまり書記官を当時は書生、また書吏と呼んだ。東大寺写経所には、その書吏のうち、とりわけ技能の優れた者が集められ、経生と呼ばれた。経生は経師（きょうじ）とも呼ばれ、それが表具店をさす経師屋の語源となった。経生は装潢（そうこう）（表具）の業務を兼ねることが多かったのだろう。書写能力は、家柄や身分では役に立たない、技能だけが問われる世界である。それだけに、書吏になることは、庶民に開かれた、数少ない官途への手段であった。

奈良時代の書吏の書法は、唐代の様相をそのまま反映するものであった。その代表となるのが、光明皇后が聖武天皇の遺愛の品を、東大寺盧舎那仏に奉献した際の目録である、「東大寺献物帳」のうちの「国家珍宝帳」である。ここには王羲之書法を基盤とし、そこに欧陽詢、虞世南の書法が加味されている。それが日本人の手になるものであることは、羲之の「羲」字中の点画に一定した誤りを犯しており、万葉集に「羲之」を「義之（てし）」（手師と同音）と誤っているように、中国人や朝鮮人ではありえない誤りになることでわかる。

平安時代の八九四年に、菅原道真の建言により、遣唐使が廃止された。といっても最後に派遣されたのは八三四年のことで、当時にはすでに遣唐使経験者が、一人とて生存はしていなかっただろう。それからの日本文化は、ひたすらに国風化をとげていった。今般の主題となる『播磨国風土記』は、平安時代後期の写本であるとされる。仮に紀元千年頃の筆写であるとすると、遣唐使廃止からは約百年が経過し、三跡として最後にある、藤原行成が活躍した時代になる。

その頃に、なぜ『播磨国風土記』の写本を作成する必要があったのだろうか。おそらく『風土記』は朝廷の図書寮において管理されていたことと思われるが、作成されてからすでに三百年近くが経過して、破損や虫食いが深刻になっていたのだろう。原本がしっかりしているうちに写本をとっておこうとは、なかなか見上げた見地である。平安時代というと、内裏の華やかな舞台ばかりが描かれがちになるが、国家とは何を責務とするかを理

解する、地道な朝廷経営がなされていたことを裏付けている。

奈良時代は楷書（真書）が充実した時代であった。その力量はいわゆる天平写経として評される、膨大な量の写経事業に象徴される。それは唐朝を反映するもので、唐では二代帝の太宗が朝廷内に弘文館を設置して欧陽詢、虞世南を学士とし、書法の充実にあたらせた。朝廷における公式字体は院体（館閣体）として厳正に定められ、これができない者は科挙に及第させなかった。これはパソコンのフォントの一つである教科書体に近いもので、中国では唐朝体の名称で扱われている。奈良朝の公式文書は多くは残らないが、『風土記』も地方から上申される公式文書に類されるものであるからには、厳正な楷書によって書かれていたはずである。

ところが、平安時代の半ばとなり、唐との国交が廃されて日本文化の国風化が進められるに伴い、楷書を厳正に書く精神が薄らぎ、むしろ楷書であっても行書的筆脈を使って、柔らかく書くことが好まれるようになっていった。このことは、北魏体を踏まえてよくよく厳格に書かれていた写経体も例外ではなかった。そして、その影響が今般の『播磨国風土記』にも認められるのである。

筆者は『播磨国風土記』の全巻を縦覧したわけではないので草卒には言えないが、見た限りにおいては字体は一定したもので、独自の書法を成している書吏が任命を受けて、一人で書写したものと思われる。写経生が中国伝来の仏典を転写する場合には、その書法までも忠実に模写していたが、この『播磨国風土記』においてはそうした態度がなく、もっぱら文字を正しく転写することに集中し、しかもなるべく早く写し上げることが目指されたかに見える。従って、書写された各字については、原典どおりであると理解してよいだろう。そして、そこに当時における書吏の、書法のあり方としての気風が反映されているのだろう。

二、生徒たちの取り組みと成果

高等学校の芸術科書道の授業内容は、大半が古典臨書で占められている。近年盛んになっている、

高校生によるパフォーマンス書道は、あくまでも教科外の自由活動である。
　ここで「臨書」の語にこだわっておくと、これはあくまでも日本で定着した語であって、中国人の常識とは異なることが日本人には認識されていない。例えば前掲の「東大寺献物帳」中の「国家珍宝帳」に、「臨王羲之諸帖書」とある。これは必ず羲之の尺牘を原寸大に写し取った複製のようなものに相違ない。あるいは、「蘭亭序」には「八柱第一本（張金界奴本）」「八柱第二本（褚模本）」「八柱第三本（神龍半印本）」などの、まさに数えきれない模本があるが、いずれも原本と同寸であることが原則になっている。今日の中国人でも、古典を臨書させようとすると、なるべく原寸で模写しようとするであろう。つまり、「臨王羲之諸帖書」の「臨」とは「臨模」の「臨」であって、当時には「臨書」の用語自体がなかったと理解すべきであろう。
　また、日本の書道教育では臨書を形臨、意臨、背臨に区別する習慣が長らくなされてきた。これらは、おそらくは明治以後になって、日本の書家が用いだした造語であろう。形臨とはもっぱら形の外観を忠実に写しとることであり、意臨とは原本にある筆意を汲みとって臨写することであり、背臨とは「背」字中にある「そらんずる」の意を取って、原本を見ずに、諳んじて書き出すことを言う。あるいは、原本の書法を用いて、他の字句を書する意にも用いられる。
　さらに、臨書の対象にされる古典とは、歴史上に名だたる名跡をさしている。ところが、『播磨国風土記』はすでに述べてきているように、書吏による実用書字であって名跡にはあたらない書跡である。しかも、今般の臨書活動は冒頭で述べたように、通常になされている古典臨書とは、その趣旨を著しく異にするものである。
　古典臨書とは、あくまでも古典の持つ優れた書法を学ぶためになされる作業である。従って、原本における造形性に最大の観点があって、文言の持つ論理性や文学性は二の次に置かれる。臨書しながらその文言が読めず、何を意味しているか知らずに平気で書いているというのは珍しいことではない。これを知って中国人が、「中国人は文字

を書いているが、日本人は模様を描いている」となくてはならない。

今般の企画は、高校生に対して『播磨国風土記』を読むことによって、自分たちが生活する郷土の地名が、いかなる理由をもってつけられたかがわかること。それが千三百年を経過した遠大なる歴史性を有するものであること。そして、そこには日本人が切り開いた独自の表記力が展開されていることを理解してもらおうというものである。しかも、活字に起こされた文字によって読めば済むことを、あえて平安時代の写本原跡を提供して歴史的距離を実感してもらい、そこから引き出された認識と理解を、臨書作品として表現してもらおうという欲の深いものである。これは日本の書道教育史において、まさしく初めてなされる試みであることから、そもそも本企画の趣旨が生徒たちにおいて、ただちに反応されるか否かに不安を含むものであった。

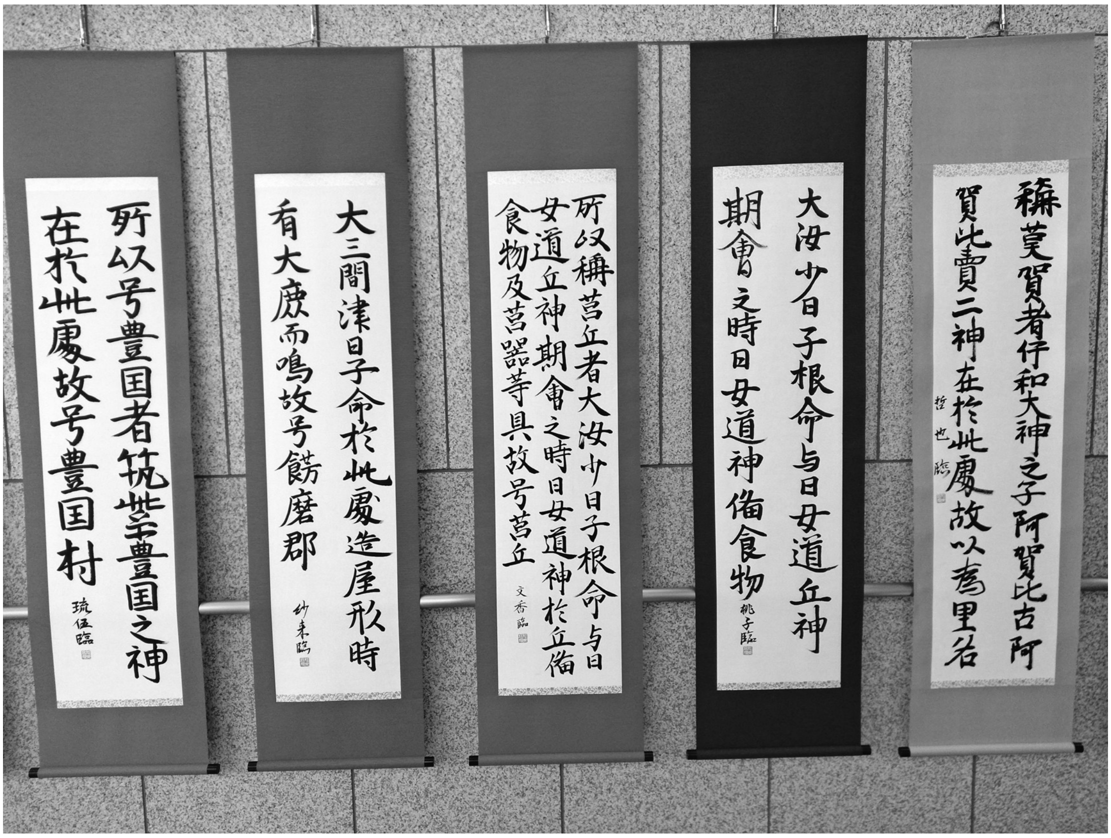
生徒たちの作業は、当館が準備した『播磨国風土記』の抜粋コピーを読むことから始まった。近年は漢文の存在がすっかり日常生活から乖離して、読める人がほとんどいないという実情にあるが、生徒たちには受験という重大な目標が控えているためか、決して逃げ腰ではなく、積極的に向き合う姿勢を示してくれた。書きたい文言を探すこと、これは書作における根本的な作業になる。

さらにそれを、半切作品（本紙三五×一三五センチメートル）として、展示に堪える形に作り上げなくてはならない。字数、各字の大きさ、配置、署名の入れかた、すべてが生徒たちには初めての経験なのである。これには筆者も、専門家としての常識を加味して、手を差し伸べざるを得なかった。

生徒たちは子供のころから、「お習字は大きな字で元気いっぱいに」と教育されていて、その習慣から字をついつい大きく書きすぎてしまう。そのために、書きたい字数と紙面とのバランスがとれず、なかなか作品らしくならない。やむなく、文意が通ることを優先しながら、途中の幾文字かを省略してまとめてもよいと助言することがあった。それに、小学生の時から墨を磨らず墨液を使っ

てきているため、墨を濃くしないと気がすまなくなっている。作品は裏打ちして軸装展示になるので、墨色の品位もたいせつな要素になる。

　生徒たちは私たちの言わんとする意味をすみやかに理解し、ほんとうによく取り組んでくれた。これは県立姫路東高等学校という名門の生徒であればこそ、なしえたことなのだろう。これによって生徒たちは、自分たちの周辺にある地名が、神の存在がまだ現実のものであった時代以来の、いかに深い歴史性とのつながりを持つものであるかということ、さらには奈良時代から平安時代にかけての行政府がこれを重んじ後世に伝えようとしたことに、国家形成とは何かの一端を実感としたことであろう。そして、これを書した古代の書吏と、千年の隔たりを越え、呼吸を合わせて筆を動かすことによって、そこに感情移入が実現されているともいえるだろう。生徒たちの取り組みには、文人の営みに達するものがあったといっても過言ではなく、古代の書跡が若者たちの、新たなる息吹を生み出してくれる可能性を感じた活動であった。



▲館内ロビーで展示された作品の一部